福島からエール

高橋 英明

福島県

９年前、未曾有の災害をもたらした東日本大震災以前、
そこには、人々の生活があった。
幾多の苦難の時間を経て
福島市内の仮設住宅も解体されている。
しかし、原発事故の問題が解決し、
教訓が生かされなければ「通常」の日々に戻ることはない。

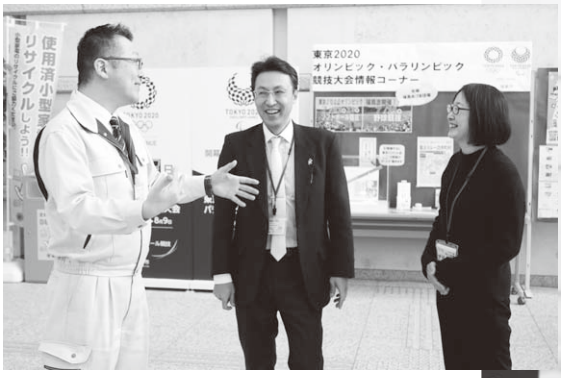
福島県手話通訳問題研究会運営委員の皆さん

高橋さんは福島市役所環境部　清掃指導係長として仕事に励んでいる。
先の台風被害では被災ゴミ処理の多忙な日々を送り、現在、真剣に環境課題に取り組んでいる。
CO_2 削減やSDGs※への取り組みなど環境への関心は世界の大きな流れである。
ゴミの減量化など、高橋さんの仕事は地球を考える最先端にある。

※ Sustainable Development Goals
(持続可能な開発目標)の略称。

Les liens
リアン

手話オヤジの会が発足の原点。もっといい名前ない？との時に浮かび上がったのが「璃庵」。
偶然フランス語の「絆」を意味することばの発音「リアン」と同じことが判明、「リアンの会」に決定。
他業種人が集う文化サロンのようである。真面目な話の時や酔っ払い集団と化す時もあるらしい。
今、高橋さんと「教授」とニックネームで呼ばれている人との間では
「子供たちにどのような形でゴミの分別化を教えたら良いか？」を
考えるプロジェクトが進行中。



福島市役所
設置手話通訳者のお二人と高橋さん

福島市役所
設置手話通訳者
間船（まふね） 博さん

手話の師匠、斎藤千英さんと福島わらじ祭りの巨大わらじの前で

福島県内の自治体に「手話言語条例」制定の動きが広がっている。
安定的な立場として手話通訳士という明確な職業が固定化されれば
聴覚障害者福祉の柱となるのは間違いない。

手話を始めて師弟の関係は20数年。千英先輩からのメッセージは、昔から変わらないエールだった。
「何事もファジーに考えられるところは英明の良さであり、手話には大切な要素だよね。
そして、決めたら実行！の即断力と、人としての厚みがあるから、みんなついていきたくなるんだよ。
ところで、次の世代は出てきているの？」
高橋さんの背中を見て、新たな世代の人材も活躍している。
先輩から託されたエールは、確かな活動に形を変えて受け継がれている。

古関裕而生誕100年モニュメント

これまで福島は全国の多くの人たちとの絆で支えられてきた。
2020年東京オリンピック・パラリンピックの野球・ソフトボール競技の開催が
予定され、作曲家古関裕而（こせきゆうじ）夫妻を描いたNHK朝ドラも始まる。
新しい幕開けは少し動き出した。今、福島から全国に向けて新たな発信が始まる。

写真/文　松本 博